

II. 「宇宙文化学」連携講義成果—学生レポート実例集—

なぜ人工衛星に愛称をつけるのか？

神戸大学3年 中野綾子

「はやぶさ」が地球に帰還したとき、「はやぶさブーム」と呼ばれる現象が起こった。「はやぶさブーム」の原因は、主にネット環境が充実して情報が安易に手に入れられるようになったこと、帰還時のメディアでの取り上げ方(映画化)、多くの苦難とそれを乗り越え成果を上げたという感動のストーリーの存在、そして日本のアニミズム思想による擬人化の影響があげられる。このことについて、その原因と過程について調べ発表会にて発表したけど、時間がなくて調査できなかつたいくつかの疑問が残っていた。

「はやぶさ」がブームとなったのは、単に大変な苦勞を得たから人々に感動を与えられただけなのだろうか？はたして「はやぶさ」の正式名称「MUSES-C」という名前で世間に発表されていた場合、「はやぶさブーム」のような影響力を持ちえただろうか？「はやぶさ」と呼ばれる愛称の効果とは、はたしてどのようなものであったか？

先にも述べたように「はやぶさ」の正式名称は小型惑星探査機「MUSES-C」だが、これを「はやぶさ」という愛称で呼ぶようになった由来は次のようである。

当時の宇宙科学研究所の関係者などでこの探査機に愛称を付けるにあたって、候補がいくつか出たが、もっとも人気が高かったのが実は「はやぶさ」ではなく「アトム」だった。打ち上げの2003年が鉄腕アトムの誕生年に当たっていたことや、地球からの操作が必要ない自律型の探査機であることなどから、アトムの名称はとてもふさわしい名前だと思われていた。

以前、人工衛星に「火の鳥」という名前をつける際、漫画『火の鳥』を書いた手塚治虫のところまで許可を得にいったとき、手塚治虫から「ああ、もうどんどん、私の漫画の名前を使ってください。『鉄腕アトム』とかもね」と言われたため、「アトム」という愛称でほぼ決定と思われていた。ところが、名称選考役のある一人が、「アトム。アトムねえ。なんだか、原子爆弾(Atomic Bomb)を連想しちゃうなあ」とぼそっと一言、発したことが発端となり、これにより急に「アトム」はトーンダウンして、ほぼ決まりかけていた名称はボツとなってしまった。

そこで浮上してきたのが、第二候補として上がっていた「はやぶさ」だった。鳥のハヤブサのように、衛星イトカワにさっと寄って、ぱっと岩石を採集して帰ってくるその勇姿。また、惑星イトカワの名のもととなった糸川英夫が、太平洋戦争の時期に「隼」という飛行機を開発していたこと。さらには、かつての宇宙科学研究所の若手職員が、東京から鹿児島の内之浦のロケット打ち上げ台まで行くのに、寝台特急「はやぶさ」を使っていたこと。これらのことから、最終的に「はやぶさ」で落ち着いたようだ。

このことから、「はやぶさ」という愛称の選考は一筋縄ではいかず、様々な考慮と経緯を得

て決定した愛称であることがわかる。「はやぶさ」だけでなく、日本は様々な人工衛星や探査機を宇宙に向けて打ち上げているが、初期の日本の衛星には日本の花の名前が用いられていた。これは、「宇宙に花開け」との意味を込めて名付けられたそうである。それに加えて、常に太陽の方向を向くことからつけられた「ひまわり」、花の名前以外にも、金星探査機に金星が最も美しく輝く明け方の時間帯を意味する日本の言葉を由来とする「あかつき」、月探査機には「竹取物語」に出てくる月に帰る美女「かぐや姫」を由来とする「かぐや」など、その衛星の目的や特徴との関連、日本社会や日本の伝統との関連、そして開発者たちの思い入れと期待を込めて愛称はつけられている。

人工衛星に名前をつけているのは日本だけのことではなく、世界中の国で行われていることである。例えば、アメリカの月へ行った有人宇宙船「アポロ」は、ギリシャ神話の月の神“アルテミス”に対応した名前となっているし、「ソユーズ」は“労働組合”や“ソビエト連邦”などを表すロシア語がその由来となっている。そこで、気になったのが神話の神や偉人の名、“平和”や“望み”といったポジティブな言葉など、「愛称のもととなった言葉に力を持っているものが多い」という点である。これは人々の印象に残すという目的への目論見もあるだろう。しかし、一つ気づいたのは「力のある物の名を借りることで、人々の心の中でその物に対する運命が決定づけられ、その通りに物事が運ぶことを予想・期待する」ということである。つまり、「かぐや」と聞くと、人々は自動的に「月に行く探査機で、月の探査を行い、謎を解明する」というシナリオを予想し、期待する。「パイオニア」と聞くと、人々は「新境地を切り開く人工衛星」という想像をしてしまう。実際、「パイオニア」は「開拓者」という英語が由来であり、パイオニア 10 号、11 号は人類史上初の木星以遠の惑星の探査を目的としていた。このように、名前の威力は物の運命を決めてしまう要素を多分に含んでいるがゆえに、とても重要なものなのである。そして、「はやぶさ」が人々の感動を呼んだ原因を、この部分からも見いだせる。感動とは、予想や期待を裏切って、それ以上の結果を出すときに生まれる。「はやぶさ」の由来のひとつは、上記でも述べたように鳥のハヤブサが目標に向かって精確に飛び、ホバリング、サッと獲物を獲る姿からきていて、「はやぶさ」は小惑星に向かって精確に飛び、上空に留まった後タッチ・アンド・ゴーでサンプルを得るという目的・人々の期待をもっていた。しかし、実際の「はやぶさ」は人々の期待を裏切って、スムーズに物事は運ばず、エンジンの故障や一時行方不明になったりしながらも、予想していた帰還時よりも数年遅れて何とか帰還し、しかも世界初の成果をなしとげたという構造が、感動を呼ぶ黄金ルートであったのである。

名前の由来は重要であるが、もう一つ、日本の人工衛星の愛称を見て力を持っていると感じたのは“ひらがな”の威力である。衛星や探査機の愛称の表記にはひらがなが用いられるものが多い。“ひらがな”というのは日本独自の文字であり、就学前や就学後 1 年以内の子供ならだれでも読み書きができるという特徴がある。人工衛星だけでなく、新幹線の名称や海上自衛隊、海上保安庁が所有する船の名前などもほとんどがひらがなを使用している。このことについて考察を行いたい。

海上自衛隊の命名基準は海上自衛隊の訓令に書かれており、その決まりとして、①人名、都市名は使用しない、②艦名の表記はひらがなのみ、③同型艦には基本的に同じ系統の名前を使用する（はつゆき型なら「ゆき」がつくなど）などがある。また、戦闘に従事する護衛艦では、旧海軍の艦名を引き継いだ例が多い。そして、海上保安庁が保有する巡視船名の表記もひらがなのみである。ただし、海上自衛隊とは異なり促音、拗音に小さな文字を使用しない。測量船のみ漢字が用いられている。

日本で、命名規則を設けて艦船に体系的に名前を与えるようになったのは明治の海軍建軍以降のことである。明治以後の日本の特徴として、“艦船名に人名を当てない”ことがあげられるが、これは明治天皇から艦名について、臣下が諸外国では偉人の名前をとることがある旨を伝えたとこ、船が沈んだらその人に失礼になる」との言葉があり、以後日本では艦名に人名を使用しないこととなったとされている（しかし1982年に所有していた砕氷艦「しらせ」については、日本人初の南極探検者の白瀬轟中尉に因んだこの名称が公募で上位だったが、これを採用した際は昭和基地近くの地名「白瀬氷河」に由来するとしてこの問題をクリアした）。また、戦艦の名称の由来は旧国名や別名（大和、武蔵、扶桑など）、山岳名（金剛、比叡など）、河川名（最上、信濃、北上など）、「空」に関わる瑞祥の鳥や伝説上の動物（鶴「龍」「鳳」とおめでたい言葉の掛け合わせ（瑞鶴、大鳳など）、そして駆逐艦の名は天象・気象・風物・草木・植物などからつけられた（雪風、陽炎、秋月、五月雨、不知火、葦、呉竹など）。

このことから、船の名前については戦後にひらがなを用いられるようになったとわかる。そして、理由のひとつに西洋の考え方の輸入がされたからということは考えられないだろうか。前から不思議に思っていたのだが、船はフランスやドイツなどを筆頭にヨーロッパや文法上の性が明確化されていない英語圏でも女性名詞として扱われている。船だけでなく、英語では乗り物を指して言うとき、“she”が使われることもしばしばである。なぜ、船が女性なのか、その理由には明確な学説は無いようだが、船乗りたちと船の関係が男女の関係と似通ったところがあるからでないか、と言われている。例えば、①その周囲には、一団の男たちが付きまとい、常にてんやわんやの大騒ぎが演じられる、②見栄えをよくするために多量のペンキ（紅、白粉）を必要とし、時には全身をきらびやかな装飾（満船飾）で飾りたてる、③手間と維持費がかかるもの、といった要素があげられる。また、戦闘時は常に支え、支えられ、の関係にもなることから母や妻といった親密な関係性を疑似的に感じられたからではないか。現代において、車に対して思い入れの強い人が自分の所有する車に対して「愛車」という表現を行うのと一緒である。

つまり、近代以降船の名前にひらがなが用いられるようになったのは、船を女性として見る西洋の考え方が浸透したからである。ひらがなの特徴は「やわらかい」「丸っこい」「流動的な曲線」などがあげられる。また、昔からひらがなは私的なもので女性が使うもの、漢字は公的なもので男性が使うものとされていて、ひらがなのことを「女手」と呼んでいた。以上のことから、日本人の精神には「ひらがな＝女性、漢字＝男性」という漠然とした印象を

持つ人も少なくないだろう。以上のことから、人々はひらがなに親しみやすさを感じ、そして、それが定着して新幹線の名前や探査機の名前などにも利用され、その名前を付けられた物に対して「親しみやすい」という印象を人々に抱かせるのでは、という結論に達した。

以上、愛称の持つ力の理由について、“愛称の由来の言葉の持つ力”と“ひらがなを用いた力”という二つの観点からそれぞれ考えてみた。この考察を行うにあたって、様々なネットの情報を検索して繋ぎ合わせてみたのだが、出典が不明瞭なものが多く、そして情報が少ないため、かなり強引な結論付けを行うに至ってしまった。しかし、愛称に込めた意味や要素を考えていく上で、いかに人々が宇宙船の開発や研究に熱を注いでいる・いたのかが感じられ、自分の名前はもちろん、「名前」の大切さを忘れないでおきたいと思う。

参考文献・参考 URL

- 永原順子 (2012) 「自然物および人工物の擬人化にみられる信仰心 (第十一部会, <特集> 第七十回学術大会紀要)」日本宗教学会編『宗教研究』85 巻 4 号
Answers.com “Why are ships named after women?”
http://wiki.answers.com/Q/Why_are_ships_named_after_women
(最終閲覧 2013/8/4)
- hayabusafan(2009) 『はてなダイアリー：はやぶさまとめニュース』
<http://d.hatena.ne.jp/hayabusafan/20091124/p14>
- Wikipedia 船名 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%88%B9%E5%90%8D>
(最終閲覧：2013/8/4)
- 阿部新助 (2009) 「ロケットかミサイルか!?!」『星空の旅人 天文学界第一線で活躍する天文学者の記録。』2009/04/10
<http://www.junkstage.com/abe/?p=87> (最終閲覧：2013/8/4)
- 福田和昭 (2006-2011) 「宇宙を駆ける名前」『塩屋天体観測所』
<http://www.h2.dion.ne.jp/~kazuf/sao/storeroom/nametospace.htm>